

第5回 東映集団時代劇

東映集団時代劇。それは1963年からわずか数年間、時代劇のメッカ・東映京都撮影所で製作された時代劇映画の一群のことを指す。そのほとんどの作品は当時、熱心なファンを除けば、決して大衆に支持されたわけではないが、サスペンスフルな物語と激しいアクションはむしろ現代的で、近年になって再評価の気運が高まりつつある。そこで今回は、「《東映集団時代劇》ベスト5」を取り上げながら、その魅力を検証していきたい。

50年代、東映時代劇は映画界の覇権を握っていた。煌びやかなスターたちと勧善懲悪のストーリー、舞踊のように美しい殺陣を前面に出した明朗・軽妙なその時代劇たちを大衆は大いに支持し、東映は業界のトップの座に君臨し続ける。だが、あまりに量産が続いたために段々と観客から飽きられ始め、60年前後にはジリ貧状態に陥った。

それにとって代わるように現れたのが東宝の巨匠・黒澤明監督。リアルで激しい殺陣と知的でスリリングな物語展開をもって61年『用心棒』、62年『椿三十郎』を記録的大ヒットに導いている。この刺激的で新鮮なアクションを大衆は支持、東映時代劇は古色然として映るようになり、その興行成績は一気に落ち込んでいった。

63年、その盛り返しの切り札としてスタートしたのが、東映集団時代劇だった。

舞踊化した殺陣をリアルなものに、物語は《情》より《理》を第一に、人気の落ちてきたベテランスターと人気の伸び悩む若手を組み合わせて集団の魅力を提示する……そうした方針の下、企画が立てられていく。

第一弾となったのが、『十七人の忍者』（監督：長谷川安人／脚本：池上金男／出演：里見浩太朗、近衛十四郎、大友柳太朗、東千代之介ほか）。ハリウッド映画『ナバロンの要塞』を下敷きにした本作では、城に潜入しようとする忍者たちと、それを阻止せんとする城方の侍たちの読み合いと死闘が描かれている。そして、本作の興行的・批評的な成功を受けて製作されたのが『十三人の刺客』だった。

■『十三人の刺客』

（1963年／監督：工藤栄一、脚本：池上金男／出演：片岡千恵蔵、里見浩太朗、嵐寛寿郎、内田良平、丹波哲郎ほか）

無敵のヒーローによる豪快な活躍も時代劇の大きな魅力だが、敵味方が対等な力関係で正面からぶつかり合う攻防戦もまた大きな魅力である。『十七人の忍者』はそのことを提示してのけた。そして、『十三人の刺客』は『十七人〜』と同じ池上金男（後の池宮彰一郎）の脚本により、さらにスケールアップした物語となった。

本作は、暴君を隠密裏に暗殺することを命じられた「十三人の刺客」たちの活躍を描いた時代劇だ。十三人のプロフェッショナルが一つの目的を果す。そのためには、人と人の

情けは「余計なもの」と全て捨てて、いかなる困難があってもひたすら最後まで目的を遂行する。描き方は即物的なものにして、情緒的なものは極力排除する……。悪役も従来の時代劇に見られた「主人公にやられっ放し」ではない。暴君の家臣には主人公（片岡千恵蔵）のかつての友（内田良平）がいて、軍師としてその前に立ちはだかる。両者の知恵比べを縦軸にしなが、作戦が成功するかしないか、そのサスペンス一点に物語は絞り込まれた。

特に圧巻はラストの決闘シーン。刺客たちは宿場町を要塞化し、そこに暴君一行を追いこんで迎え撃つ。十三人 vs. 二百人という数的不利をカバーするため、宿場にはさまざまな仕掛けがほどこされた。その戦場で、壮絶な死闘が展開される。

仕掛に次ぐ仕掛。そんな時代劇史上でも前代未聞の要塞攻防戦をどう演出するかが、映画の出来を左右することになるのは間違いない。それには、自らもアクションに対してアイデアのある監督でなければならない。だが、東映京都では殺陣のシーンの演出は殺陣師の専権事項であって、監督はタッチしないことがほとんどだった。ただ一人違っていたのが工藤栄一。アクションに徹底したこだわりをもつこの男は、当時の東映京都では珍しく自ら殺陣のシーンの演出にも積極的にアイデアを出していた。

工藤は美術デザイナーと徹底的に話し合い、実戦的なリアリズムに基づいて要塞のセットを建設。ここを舞台に、従来の東映時代劇の華麗さを排した、血みどろで凄惨な殺陣を展開した。

■『大殺陣』

(1964年／監督：工藤栄一、脚本：池上金男／出演：里見浩太朗、大坂志郎、山本麟一、平幹二郎、大友柳太朗ほか)

『十三人の刺客』がヒットを遂げたことで、引き続き工藤・池上のコンビで姉妹編をという声が社内で上がる。プロデューサーサイドは、第一次世界大戦のきっかけとなった1914年の「サラエヴォ事件」を時代劇に翻案することを思いつく。オーストリア皇太子がサラエヴォで暗殺されたこの事件は、一度暗殺に失敗したものの、その帰り道の油断したところを狙って、暗殺を成功している。これを時代劇にしたら、面白いエンターテイメントになるという発想によるものだった。

それに合った日本史上の政治的事件は……と探している時に思いついたのが、江戸幕府五代将軍の争いだった。「甲府宰相と呼ばれた綱吉の兄は早死にしている。彼が先に将軍候補となり、甲府から江戸へ向かう途中に暗殺されたことにすればいいのではないか」という案がプロデューサー側から出たことで、話の設定は決まる。

今度は、敵をどこに誘い込むのか。少人数でやるには『十三人〜』同様にどこかに敵を追い込む必要がある。ここでも池上は冴えていた。

「吉原がいい。大門を閉じれば、あそこに閉じ込められる」

さらに、池上は『十三人〜』との色分けを思い立つ。『十三人〜』は指揮官の下に統率のとれた戦闘集団だった。今度はバラバラの無関係の人間が集まり、しかもいずれも戦いそうにないロケ地が掻き集められたものにしようというのだ。

そして、現場もまた凄まじいことになる。殺陣師の谷明憲（俊夫）はクライマックスになる吉原手前のドブ川で壮絶な大乱闘のシーンを作り出した。

滋賀の琵琶湖畔にあるロケ地のドブ川はつかると腰まで水位がある。場所によっては足が立たない深さのところもあった。そんな中を何十人もの役者たちが敵味方入り乱れて斬り合いを繰り返す。

何百メートルも水中を走りながらの立ち回りは、手順もなにもあったものではない。水中の役者たちはやけくそのような表情で絶叫しながら、ひたすら刀を振りまくった。まさに極限状態との戦いだった。

カメラの後ろから鬼軍曹のような凄まじい形相で谷が怒鳴りまくるため、息ができなくなって苦しくなろうとも、役者たちには逃げ場はなかった。1カット終わるごとに皆疲れ果て、川辺で死にそうな顔でぶっ倒れ、また撮影が始まると重い体をひきずりながら水の中に入っていった。

そんな彼らにさらなる困難が遅いかかってくる。このドブ川、川の底にはヘドロが溜まっていたのだ。その中で水しぶきをあげながら激しい集団戦闘を繰り返したため、ヘドロが口の中に入ってしまった。まず最初に倒れたのが河原崎長一郎で、下痢と嘔吐が止まらなくなる。次々と役者たちは倒れ、東映随一の強面で知られる山本麟一も腹痛にのたうちまわった。彼らの近くで叫びまくっていた谷も水を浴びてしまい、嘔吐に苦しめられることになった。それでも、誰一人音を上げることなく数十人の役者たちはヘドロのドブ川で剣を振るまくった。

宿泊するだけの予算はなく、毎日撮影所とドブ川を往復する日帰りのロケだった。そのため、ドロドロになった衣装を着替える場所も洗う場所もない。皆そのままの格好でロケバスに乗って撮影所へ帰った。夜になると毎晩のように疲れ果て蒼ざめた顔の役者たちが降りてくるのを見て、撮影所スタッフたちは「あの現場で死人が出るんやないか」と評判し合った。

後に、東映京都では東京からやってきた深作欣二監督が『仁義なき戦い』で壮絶なアクションを演出した。が、多くのスタッフや斬られ役はこの『大殺陣』の現場を経験していたのもあり、「あれに比べれば」と、深作組のハードな撮影にもビクともしなかったという。

役者たちが文字通りの命がけで演じただけあり、画面に映るその表情は必死の形相そのもので、暗殺劇の迫力を十二分に伝えるものになっていた。

■『柳生武芸帳 片目の忍者』

(1963年／監督：松村昌治、脚本：高田宏治／出演：近衛十四郎、松方弘樹、東千代之介ほか)

こうした集団時代劇が東映で作られるようになり、内容が大きく変化したのが近衛十四郎主演の『柳生武芸帳』シリーズだ。

近衛が柳生十兵衛を演じるこのシリーズはそもそも、剣豪役者としてその立ち回りの迫力が時代劇ファンの中で評判高かった近衛の剣の魅力を活かすべくスタートしていた。が、当初はその内容は軽妙なパターン時代劇の枠を出るものではなかった。

それが、がらりと一変する。

その原動力となったのが、当時若手の脚本家だった高田宏治。量産体制の脚本家の一人としてローテーションをこなし、パターンの脚本ばかりやらされてきたことに対する不満があった。

そんな高田に『柳生武芸帳』シリーズが任されることになる。彼なら、思う存分にアクションが書けるだろうというプロデューサーサイドの判断だった。

高田がシリーズに持ち込んだのは「現代アクションの発想」だった。

「近代戦闘の論理を時代劇に持ち込めないだろうか」

常々そう考えていた高田は柳生一門を「江戸幕府のFBI」として想定し、毎回それに挑みかかる敵との「戦争」を描くことにした。天下無双の近衛＝十兵衛を追い詰めることができるのは、近代的兵器と用兵術しかないと考えたのだ。

従来の戦記小説に「実際の戦場」の様子を克明に描いたものがないことに高田は不満を抱いていた。本当の戦場は尋常な場ではないため、人間の体も心ももつはずはない。逃げ出す者も少なくなかったはず。そこで高田は考えた。戦いの雌雄を決するのは刀と刀の戦いではない。「いかに相手の戦意を失わせるか」つまり恐怖心をいかにして敵に植えつけるかということこそが、戦争で勝つためには最も重要なことなのだ、と。そして、人物たちの恐怖心を追うなかで必然的に生まれてくる行動を、物語を展開させる原動力にした。

そして、高田流の「戦争アクション映画としての時代劇」として頂点に達したのが、シリーズ最終作『片目の忍者』だ。

それは『十七人の忍者』で始まった集団時代劇路線に、高田が呼応して出来た作品だった。『十七人の忍者』はさまざまな特技をもった忍者が、その個性を生かしながら難攻不落の城へと迫る内容になっている。

「それなら、こっちは没個性で行こう」

高田は柳生一門を「集団として初めて力を発揮することのできる忍者群」として、唯一の武器である己が肉体を犠牲にししながら目的を遂行させることにした。そして、柳生一門の目的は、敵忍者軍により砦に拉致された殿と姫を救出することだったが、彼らを待ち受ける砦が並大抵のものではなかった。

高田は砦をだだっ広い野原に置いた。忍者が術を使えるのは暗い影があるからだ。影のない見晴らしの良いところでは、忍者の技能は無力化され、ただの兵士にすぎなくなる。そして、砦は二重三重の防壁に囲まれ、何千もの鉄砲が無防備な柳生忍者を狙う。

これを突破するには、どうすればいいのか。高田は凄まじいアイデアを思いつく。十兵衛一人が本丸にたどりつきさえすれば任務は完遂することができる。ならば、残る柳生忍者たちはその捨石となるのみ。自ら盾として十兵衛を取り囲んで絨毯砲撃を浴びながら十兵衛を進ませ、己が体に爆弾を巻きつけて突っ込んで防壁を破壊する……。そんな、戦争さながらの大アクションが展開された。

■『忍者狩り』

(1964年／監督：山内鉄也、脚本：高田宏治／出演：近衛十四郎、佐藤慶、田村高廣、天津敏ほか)

そして、主演：近衛十四郎＝脚本：高田宏治のコンビはさらなる異色の時代劇を生み出す。これは黒澤明の『七人の侍』にヒントを得てできた企画で、忍者たちから城を守るために傭兵として雇われた近衛扮する主人公をはじめとする浪人たちの話。「忍者映画」の魅力は、その超人的な能力を駆使して敵地で任務を遂行する緊迫感にある。本作ではその視点が逆転、「攻める忍者」ではなく、「忍者から守る」側からの物語になっている。忍者はいつどこから襲い来るか分からない。それをいかに見つけ出し、殲滅するか。手に汗握るサスペンスの中で描かれる。

圧巻は、近衛と甲賀忍者の首領・闇の蔵人（天津敏）が初めて対面するラストの決闘シーンだ。

決戦の舞台を、高田は地下墓地に設定した。霊廟の妖しく不気味な暗闇に潜む忍者と近衛はいかに対峙するのか、そのサスペンスを描こうとしたのだ。

この暗闇の決闘シーンを実質的に演出したのが殺陣の上野隆三。東映京都では殺陣のパートは殺陣師がコンテも割って演出をする伝統がある。それは本作でも変わりはない。上野はここで、「息の詰め方」を徹底的に研究した。真っ暗闇の中には近衛が一人だけ映る。闇の中から敵はいつ出てくるのか……観客は黙って息を詰めて待つしかない。そしてギリギリまで緊張を盛り上げたところで突然現れ、静寂の中に近衛の悲鳴が響くことで観客を「ドキッ」とさせる。それが上野の狙いだった。この息を詰めさせる時間が短いと緊張は盛り上がらないし、長いと観客が息を吐いてしまって緊張が途切れる。尺数や画面サイズなど、どうカッティングを積み重ねれば最もいいタイミングで悲鳴を上げさせられるのか、上野は計算に計算を重ねたという。

もう一つ、忘れ難いシーンがある。

敵は尋常でない技能の持ち主である忍者。そのため、守る側も尋常な心構えでは対抗できない。特に、複数の容疑者の中から「どの藩士が潜入した忍者か」を焙り出すために、主人公の採った手段は、絶句するほど非情なものだった。

ここで近衛は五人の容疑者を捕らえ、白州に引き出す。この中に一人忍者がいる。それをどうやって割り出すのか……。高田宏治の考えたアイデアは凄まじかった。この五人

の容疑者全員を一気に斬り殺してしまうのである。残りの四人は無実なのだが、忍者相手にそんな悠長なことは言っていられない。近衛の「激しさ」を突き詰めた高田ならではの脚本だった。

上野は、近衛に手の流れを説明するために、まず自分が近衛の代わりに斬って回った。この時のことを上野は、「自分には〈言葉にならない何か〉が〈乗り移っていた〉ようだった」と振り返る。それほどまでの全身全霊をこのシーンに込めていたのだ。それを見て、近衛は、黙ってうなずいた。そして、鬼神の如き表情で容疑者たちを一気に撫で斬りにしていく。

■『十兵衛暗殺剣』

(1964年／監督：倉田準二、脚本：高田宏治／出演：近衛十四郎、大友柳太朗、内田朝雄、河原崎長一郎ほか)

こうした新機軸の戦争アクション時代劇が出来たのは、主演の近衛十四郎の功績も大きい。東映の時代劇量産を支えるために松竹から引き抜かれた近衛は、あくまでもB級スターの扱いで、両御大の主演作などでは敵役に回ることも多かった。それが、一連の作品では功を奏することになる。

特に、近衛の魅力が爆発したのが、この『十兵衛暗殺剣』だ。

『柳生武芸帳』シリーズの番外編ともいえる本作で、近衛は引き続き十兵衛を演じる。敵は剣豪・幕屋大休（大友柳太朗）。幕屋は柳生から将軍家指南役の座を奪い取るべく、琵琶湖の湖賊（海賊の湖版）と手を組み、柳生に挑戦してくる。それを倒すべく、敵の本拠地のある琵琶湖上の島に乗り込もうとする十兵衛ら柳生一門だったが、幕屋の罠にかかり十兵衛だけを残して全滅する。十兵衛はたった一人で琵琶湖岸の湿地帯でゲリラ戦を展開、幕屋との一騎打ちにまでこぎつける。が、幕屋は強かった。十兵衛の刀は折れ、その圧力に押されて後ずさりすることも。そして、傷だらけ泥だらけになりながら、ようやくのことで勝利を手にする。

時代劇を本格的なアクションにするためには、戦闘のリアリズムを採り入れる必要がある。が、東映生え抜きのスターたちの多くはそれを嫌がった。あくまでも見栄えの美しさにこだわったのだ。が、近衛は悪役もしていたことから、自ら進んで動き、どんな無理な殺陣をつけられても嫌な顔一つせずに、状況に応じたアクションをすることができた。また、他のスターたちが嫌がり続けた「泥で顔を汚す」ことも厭わずに、むしろ率先して泥やドブに顔を突っ込んでいった。

そして、悪役をこなしてきたことで、相手に攻め込まれる「受け」の殺陣を表現するのが近衛は抜群に上手かった。従来の東映時代劇の主人公は完全無欠のヒーローでなければならなかったため、どんな大勢の敵を前にしても完全無欠の強さで圧倒する殺陣にせざるをえなかった。その点、近衛は悪役として斬られ慣れてもいるので、構わずにそうした手

をつけることができる。近衛の十兵衛は敵に斬られては悲鳴をあげ、追い詰められては怯えた表情をする。そして、泥まみれ血まみれになりながら這いつくばって、ようやくのことで敵を倒す。剣豪役者として「斬る」技術の見事さがクローズアップされる近衛だったが、劣勢になった状況でのアクション・リアクションもまた特筆すべきものだったのだ

そして何より、近衛がこうしたアクション時代劇にうってつけだったのは、彼自身の役者としての性質によるものがあった。

舞踊の名人でもある市川右太衛門や大川橋蔵の場合、殺陣師から立ち回りの手をつけられると、その間の息を吐く箇所・詰める箇所をすぐに感じ取って、呼吸の流れを計算することができる。そのため、どんな長い立ち回りでも息一つ乱さずに美しい立ち姿を保ち続けることができた。生来の武骨者である近衛にはそれができなかった。いかなる時でも一息で全身全霊を込めたまま一気に行くしかない。あまりの激しさに時には自らの鬣のカツラが吹き飛ぶことすらあったという。そのため、斬り終わった時には「ゼエゼエ」と息切れが凄まじくなる。これがかえって戦う男の必死さをかもし出させ、その戦闘の激しさ、過酷さを表現することができたのだった。

『十三人の刺客』は、激戦の果てに発狂した一兵士を映したところでエンディングとなる。『大殺陣』の刺客たちは全滅した。『片目の忍者』の十兵衛は「柳生に手向けの言葉は無用」と言って死屍累々の戦場をあとにする。『忍者狩り』の主人公は、傷ついた身体を引きずり、たった一人で城下を去っていった。そして、『暗殺剣』の十兵衛もまた、しかり。一連の時代劇の激戦の後には、一つとして幸福な終末はない。政治闘争の渦の中で、夢も理想もなく、ただ命じられた目的を果たすために命を捨てて戦った男たち……。そこから、落日を迎えつつあった時代劇の作り手たちの悲鳴ともいえる断末魔が聞こえてくる。しかし、だからこそ。その声は心の底からの叫びとして、五十年の時をへだてた現代の人間の魂にも突き刺さってくるのである。

【DVD 情報】

『十七人の忍者』（東映ビデオ）

『十三人の刺客』（東映ビデオ）

『忍者狩り』（東映ビデオ）